

音楽と音の本収録

## 音楽と音の本【2018No.15】

分類：単行本

著者・編者：小川理子

書名：音の記憶

副題：技術と心をつなげる

発行所：文芸春秋

発行年度：2017年2月

備考：

概要：



本書の由来と概要は[出版社サイト](#)に記載がありますので、それらを参照していただくことが概要を掴みやすいと思いますが、これに加えて読後感を記してみます。

まず、第一は著者が心酔されている、創業者の松下幸之助曰く「松下はモノを作るのではない、人を創るのだ」という精神の大切さです。モノは技術で作られ、技術は人が生み出すものだからです。この精神を基に小川氏が事業を引っ張っていかれる姿勢に共鳴できます。

第二に、いったん撤退した事業を再開する苦労は並大抵のことではないということです。これは人材の枯渇、技術の衰退からの復活が大変なことだからです。このことは一企業だけの問題ではなく、つぎのような日本オーディオ協会校條（めんじょう）会長の指摘にもありますように、人材枯渇はオーディオ業界全体の問題のようです。すなわち、

「ハイレゾ推進」と「OTOTEN」のこれからと題する日本オーディオ協会校條会長への新春インタビューの、ハイレゾ推進を強化音楽製作から再生までという項で、「解決すべき問題もあります。1つはいい音を追求する原点に立ち返ること、2つめはトレーサビリティの明確化、3つめは人材の枯渇への対応です。(中略)ハイレゾは日本オーディオ協会が定義を司り、監修しています。新しいカテゴリーが参加してきたなら、認める姿勢が必要だと思います。色々な議論があり、あるカテゴリーに対してオーディオとは認めたくないといった声も聞かれますが、厳格に管理するよりも商品自体の将来性、お客様の信頼と利便性を考慮した上で新しいものを認めていく、そういう姿勢で推進しております。」という記載があります。

<https://www.phileweb.com/sp/interview/article/201801/05/523.html>

第三に、上記校條会長の指摘にもありますように「顧客の信頼と利便性」の配慮です。実際の PANASONIC 製品を使ってみての感想ですが、マニュアルの不親切さ、操作性の問題、相談窓口や試聴室の対応能力など、さまざまなユーザーインターフェース上の問題に直面しました。Product out の視点から Market in の視点への転換が必要と思われまます。また、ユーザーとの接点である販売店への情報提供も望まれます。今日、旧来からのアナログのノウハウに詳しい店員、ネットワークオーディオへの導入に積極的な店員はほとんどお目にかかれませぬ。オーディオの基礎知識のない店員も多いのです。ヨドバシカメラのオーディオ売り場で、BNC ケーブルが欲しいと言ったら、それ何ですか？ブランド名ですか？と聞かれて早々に退散したことがありました。

第四に、生活の中でのオーディオという視点です。小川氏が「女性が欲しくなるオーディオ」なる理念を掲げており、SC-C500 や SC-C70 が実際に開発されていますが、機能そのものはそういったことが具現化されてはいるものの、第三の問題のユーザビリティのところ、ネット接続のハードルの高さと相まって障壁になっています。実際に SC-C70 や DMR-UBZ1 をネットに繋ぐ使いこなしではオーディオ歴 60 年で、実務でも工場の自動化経験があり、PC オーディオにも親しんできた筆者でもかなり手こずる状況でした。オーディオルームに複雑な機器を持ち込んで日夜奮闘するばかりがオーディオではないはずで、女性や子供や老人が楽しめる生活感のあるオーディオが実現されれば、マーケットは広がるはずで、実際コンサートに行くと、過半数は女性の時がありますし、老人も多く、また楽器を習っている子供達も来ています。「女性が欲しくなるオーディオ」の前に「女性が使えるオーディオ」の実現が必要です。

第五に、もっとも重要なことですが、オーディオ製品の開発は音楽産業の一つですから音楽的感性が重要で、小川氏はプロのミュージシャンでもあります。しかし、テクニクス製品の試聴会で開発陣が見えておられましたので、年間どのくらいコンサートに行かれますか？と問うたところ、どなたもゼロという回答でした。これでは本当の

音楽再生機器を開発して大丈夫なのかという疑念をいだかざるを得ません。かけられた曲は石川さゆりと中島みゆきなどでした。この意味ではベルリンフィルに技術者を派遣して研鑽をつませていることはおおいに期待をもたせてくれます。

最後にマーケットは、すでにあるところにアプローチするのではなく、種をまいて育てるという視点もあってしかるべきではないかと思います。SC-C70などを学校や僻地の公民館、図書館あるいは発展途上国に寄贈するような活動はできないでしょうか？ネット環境さえ整えば、CDはなくともインターネットラジオや低価格定額のストリーミングサービスの聴き放題が可能となり、そこから音楽ファンが育つと考えられます。市の図書館では大フィルの演奏家の解説でレコードコンサートが開催され、熱心な音楽ファンが参加していますが、装置は驚くほど貧弱なものです。こういったところにマーケットの種がありそうな気がします。

以上